

学校白慢

保護者と地域に見守られた 安心・安全なこども園

習志野市立東習志野こども園長 いしげ みわ
石毛 美和



1 はじめに

本園は、習志野市の東部に位置し、小学校、中学校、習志野市総合教育センターがある文教地区に建てられた幼保連携型認定こども園である。12年目を迎えた今年は、園児数235名の幼児期の学校教育と子育て支援を担っている。

2 こども園の教育・保育の取組

本園で目指しているものは、「教育、響育、共育、今日行く」という子どもも保育教諭もみんなが行きたいこども園、みんなで学び合えるこども園である。

一人一人の子どもに心に寄り添い、子どもの表現を理解する保育教諭がいて、子どもが育つ、子どもがいて保育教諭が育つことを大切にしている。

(1)夢中になって遊ぶ子どもを育む

平成21年度に開催された市指定の公開研究会での学びに「発達の道筋を捉える」がある。0歳児から5歳児の発達を本園の子どもの遊びや表現、基本的生活習慣から捉えることで、適切な援助と環境構成を行い、子どもの遊びや遊びの中の学びを支えている。

(2)健康な体を育む

発達や運動量・遊びの質の違いを考え、園庭を0歳児から2歳児の子どもたちの「乳児庭」、3歳児から5歳児の「幼児庭」というように二つに分けて使用している。さらに、広さや走る距離が必要な時は隣接小学校のグ

ラウンドを計画的に使用させていただき、幼小のつながりにもなっている。また、本園では、栄養教育を栄養士が担当しており、食への興味や関心を持たせながら食べる楽しさや喜びを味わい、併せてマナーを身に付ける機会となっている。5月から6月にかけては、地域のニンジン農家との連携で5歳児がニンジン掘りを行い、掘ったニンジン子どもたち全員が給食やおやつで食べている。その後は、自分たちもサツマイモや夏野菜等を栽培、収穫し食するという体験もしている。

(3)健康な心を育む

園内での異年齢交流、小学生との交流、中学生、高校生の職場体験等を通して、自分に優しくしてもらった喜びをたくさん味わっている。この体験からは、人に優しくしたり、相手の思いに気づき自分の思いを抑制したりする心が育まれる。また、散歩に出たり、地域の行事に参加したりする機会が多く、歌や合奏、踊りなども披露している。地域の皆様からかけていただく声が大きな喜びや自信となり、いろいろな人との温かい交流は心の育ちにつながっていく機会となっている。

3 おわりに

平成29年度も、地域や保護者の皆様の御支援に支えられ、全職員が「チーム東習志野こども園」として、未来ある子どもたちの「生きる力」の根っこ作りに努めていきたい。

動物公園の使い方

千葉市動物公園長 いしだ おさむ
石田 戡



1 動物園での教育とは

(1)動物園はメディアであること

動物園は野生から動物を都市に持ち込んで展示する場所であり、野生と都市をつなぐ中間項、つまりメディアである。持ち込まれた動物たちは普段目にするものがない存在であって、そこに動物がいることで種の多様性を感じ、形態や色彩を見ることでどうしてこんな動物たちが地球上にいるのかの不思議さを感じさせてくれる。動物園の展示はこれまで、動物をなるべく近く、檻や障害物などをなくし、あたかも自然の中にいるように展示施設を進化させてきた。これはそうしたメッセージが届くようにするための配慮なのである。

(2)動物園の教育上の利点と特質

生きて動いている動物たちは、それだけで人を惹きつけることができる。動物は魅力的な存在であり、その一挙手一投足が動物の情報を提示してくれている。動物園の良さは動物と一緒に空間にいただけで楽しくなるということにある。この楽しいという条件の中で、さまざまな活動が可能になり易い。知らず知らずの間にうきうきとしてきて、学習意欲が増してくることが最大の利点である。

2 変化する動物園と学校との関係

長い間、学校にとって動物園はもっぱら遠足の場合、即ち学校行事の場合として使われてきた。総合的な学習の時間が設定される頃から学校の動物園利用形態が変わってきた。個々の生徒たちが動物園を学習のため

に訪れるようになり、また学校もそれを積極的に勧めるようになってきている。一方、動物園側も多様化する需要に応える体制を整え始めてきた。千葉市動物公園はその中でもいち早く対応を進めてきた。動物に関するプログラムの開発、出張授業、そして最近では国語の教科書にでてくる動物の話、校外事業指導、学校飼育動物の飼い方、教員のための研修などを先進的に行ってきた。また全国的にも教育専門の職員を配置するなど体制を整えはじめてきている。こうした動きが活発化したのは、わずか10数年前からであり、いまだに十分な体制をとっているとはいえない。しかしながら、こうした流れは徐々にではあるが、これからも前進していくことは間違いない。

3 動物園の使い方

動物園での教育的利用の方法は多様であるが、ここでは千葉市の例をとってみる。

(1)プログラムの参照

動物公園のホームページを見ると、動物公園を利用する際に使えるプログラムが20例ほど提示されている。これらのプログラムは各学年共通のものであり、いわば基本型ともいえるべきものである。例えば学校で動物園学習用のワークシートを作る場合などに、これを参考にして作成するのに使える。補足的な説明が必要な場合は、動物園に問い合わせただけでありがたい。

(2)職員の活用

教育活動に資する職員は多くはいないが、最小限の要望には応えることができ

る。一昨年から教員のOBに加わってもらっているが、それ以外にも教育担当を配置してあるので、積極的に活用してもらいたい。特に事前踏査の段階で動物に関する理解をしておいてもらえると、それを応用してワークシートなどを充実することができる。また事前に出張授業などを申し込んでいただければ、その後の来園と合わせて、より深い理解へと誘導することができるだろう。

(3)資料と標本

動物公園には動物と動物園に関する資料が蓄積されている。図書や雑誌、最近では標本類の収集を行ったり、事前学習用のキットも活用できるようにしたりして、学校などの要望に応える準備が整ってきている。

4 私のお勧め学習法

(1)発見すること

動物園でのお勧めは、じっくりと観察して何かを発見することである。他人から習ったことは忘れやすいが、自分で見つけたことは長い間記憶に残る。自分の力で何かを発見した時の喜びは極めて大きい。発見は自信や意欲の向上、新たな展開へとつなげることができる。

(2)比べてみる

発見にいたるキーワードの一つに比べることがある。動物園の観察は形態で比べるのが最もわかりやすい。例えば、サル類の場合、樹上性のサルは一般に手が長く、上半身が発達しているが、比較的小型である。樹木の間を渡るに適した体になっている。また同じ樹上性のサルであっても、テナガザルとニホンザルなどでは移動の仕方が全く異なる。ニホンザルは4本の肢で立って移動するが、テナガザルの場合、前肢2本で私たちが雲梯を渡るように移動する。ではほかのサルたちはどうだろうか？

一方、地上生活するサルは、どっしりと

強い筋肉と骨格を持ち、猛獣類に対抗する力を備えている。あるいは走るのが早い。雄雌の違いも比較するのに好都合である。雄と雌がはっきりと違う種は、1頭の雄と複数の雌でファミリーを構成するが、一見雌雄の区別がつかない種は、ペアや雑婚生活をしている。他にも鳥を観察する場合だと、くちばしの型で比較するとわかりやすい。蜜を吸う鳥、木の間にいる虫を食べる鳥、鋭いくちばしと爪で哺乳類などを襲う鳥、大きな魚を一飲みにするペリカンなど。一種類だけ見てもわかりにくいのが、他の種と比べると違いが見えてくる。暮らしていく自然環境や襲ってくる敵に応じて体の形などが違う。

(3)特徴の枚挙

動物の特徴をできるだけ多く指摘させることである。キリンであれば、首が長いから始まって、舌も長い、目が大きい、まっげが長い、角があるなどなど。そのようなことをしながら、次の段階では他の動物と比べてみる。

ただ観察するだけではなかなか何かに気づき、発見につなげることは難しいかもしれない。その場合何らかのヒントが必要になる。どの程度までヒントをだせばいいかは学校での学習の進捗にかかわると思われる。

以上述べたことでも分かるだろうが、教員側でも何らかの工夫をしてもらいたい。子どもたちの個別的な発達段階は動物園サイドでは把握困難である。そのためには、事前での動物たちへの理解があるといい。千葉市動物公園では夏休みに教員向けのセミナー（＝研修）を実施している。こうした制度を活用して、動物園の利用法を考えてほしい。私たちは子どもたちが目を輝かせて、“見つけたぞ”と叫んでもらいたいのだ。